

5A_A 08 月 03 日 14:00

OJAE (Oral Japanese Assessment Europe) ヨーロッパ 生まれの日本語コミュニケーション能力テスト: 測る > 伸 びる > 育む — 対話力を鍛えて 「ことば」のできる世界市民となる —

Kōji HAGIHARA (名城大学)

Yoriko YAMADA-BOCHYNEK (ヨーロッパ日本語教育学研究所)

Yasuko SAKAI (ライプツヒ大学)

Michiko TAKAGI (マリーアップス外語学院 / ブラッセル日本人学校補習授業校)

Yumiko UMETSU

本大会のテーマ「平和への対話 何のために外国語を教える / 学ぶのか」が投げかける課題は、「日本語教育の現場は、他者と分かり合える『ことば』の獲得にどのような手助けができるのか」であると考えられる。これに対し OJAE 研究チームは、対話力を鍛えて「ことば」のできる世界市民を育てることを提案する。そのためにこそ、CEFR 準拠日本語コミュニケーション能力テストである OJAE は開発されたのであり、今や OJAE 方式による「(現在の日本語修得位置を)測る > (現在の分析から)伸びる > (協働クラスで)育む」日本語教育も実践可能となったのである。真の対話とは、話者と対話者の間に考えるための「ことば」が往還するコミュニケーション場面に於いてのみ生じるものであり、他者と分かり合える「ことば」は、この対話を実現するコミュニケーション能力の育成によってのみ獲得できる。そのため、OJAE 研究チームは、従来自明と見做されてきた「コミュニケーション場面」を問い直すことから始め、OJAE 開発の基本理念である文化記号学的コミュニケーション場面論 (Jakobson 1960) を基盤にした。同理論では、「コミュニケーション場面」は、以下のように、「発信者」と「受信者」の 2 者を含む 6 つの要因と、それぞれの要因に担われる 6 つの言語機能が発揮されることで成り立っている: 1) 発信者: 表出的機能、2) 受信者: 働きかけ機能、3) コンテキスト: 叙事的機能、4) メッセージ: 詩的機能、5) 接触: 交話的機能、6) コード: メタ言語的機能。この理論を出発点に、OJAE 研究チームのこれまでの成果を辿り、未来へ向けて協同する可能性までについて、以下の 3 発表で提示する: 第 1 発表: コミュニケーション場面論基盤の OJAE テストで「対話力」を鍛える、第 2 発表: テストがクラスのあり方そのものを変えていく、第 3 発表: AJE-SIG としての OJAE ウェブプレゼンス—OJAE ウェブページを有効に共有するために—。OJAE 研究チームは、世界の日本語教師との協働的且つ創造的な活動を意図する立場から、OJAE テスト設計に関わる情報を AJE サイト上で公開する準備を進めている。ウェブシステムの構築と共に、世界各地での OJAE 研修会を通して、OJAE がその拠り所とする欧州言語共通参照枠組と共に、広く共有されることを願う。

コミュニケーション場面論基盤の OJAE テストで「対話 力」を鍛える

Yoriko YAMADA-BOCHYNEK (ヨーロッパ日本語教育学研究所)

Kōji HAGIHARA (名城大学)

本パネルの出発点として、ヤコブソン(1960)の「コミュニケーション(comm)場面」理論を提示し、OJAE の特長 6 点を論じる。

1) テスト形態: CEFR 自己評価表 2 による自己申請レベルにて、被験者 2 名と試験官原則 2 名で実施する。テストの主人公である被験者同士がそれぞれ「自分のことば」で語り、相手と「がっぷり四

つ」に組むことが従来の口頭能力テストとは根本的に異なる。単独発話の「独話」と双方向発話の「交話」を通し、両者は真摯に課題について意見を述べ合い「対話」する。A1 レベルでは、相槌など「受け答え」も評価する。B2 レベル以上で意識的な回避や非用などが観察される場合には、柔道の試合で「指導」を与えるように「反則」と判定し、不合格とする。

2) 設計図基盤のテスト問題作成: テスト問題は、各 comm 場面 (I. 情報発信: 発信者側中心、II. やり取り: 受信者側中心、III. やりとり管理、IV. 社会言語的適切さ) に属する 53 機能群から成る「設計図」に沿って作成されている。これらの機能群は Cambridge ESOL テスト (O'Sullivan et al. 2002) を参照しており、テスト問題の妥当性は保証されている。テストの各課題は、テスト進行シナリオである「施工図」を通し、時間配分 (A レベル 10 分、B15 分、C20 分) 内での「テストスクリプト」に結実する。そのため、試験者の手腕に左右され難い信頼性の高いテスト形式となっている。

3) 言語機能具現能力の階層化: 各 53 機能は、CEFR 準拠により 6 階層化され、発話誘発資料である「プロンプト」を含む「テスト問題」となる。

4) OJAE 評価: 各レベル「評価シート」を用い、評定 5 領域「H 使用幅、S 正確さ、R 流暢性、K 結束性、I 交話」について、各課題で 2 領域ずつに絞って評価し、実行性を高める。

5) OJAE 評価基準表: 評価の客観性・透明性を目指し上記各 5 領域の階層性を明示したものである。使用には訓練を要するため、OJAE 研究チームは「ベンチマーキング検討・標準化会議」をセミナー式研修会の形で開催する (2016 年 2 月: ブリュッセルにてベルギー日本語教師会と共催、2018 年 3 月: 英カーディフ大学現代語部門日本語科と共催)。

6) フィードバック (FD) 様式: 試験結果の「レベル合否+領域別評価」を記入し、被験者・教師双方に次の学指指針を示す。

テストがクラスのあり方そのものを変えていく

Yasuko SAKAI (ライプツヒ大学)

生きた「ことば」をどういう形で測ることができるのか。そのために生きた「ことば」を引き出すようなクラス活動はどんな形で行われるべきだろうか。ヨーロッパで CEFR の概念が学校教育現場に取り入れられ 20 数年経つ現在、CEFR の考え方は欧州土壌の人間教育の中に浸透してきている。

対話ができるレベルとして、以下では B2 を大学の修了口頭試験の目標として定めたクラスでの実践的スキルを紹介する (その実践過程の詳細については高木・酒井・山田ポヒネック 2017 を参照)。

OJAE を応用した修了口頭試験を目指し、3 年間通した計画を進める。まず、この試験では何が測られるのか、CEFR と共に、学期ごとに OJAE の基準ビデオを提示し、繰り返し学生たちと話し合うことにより、更に一段階上に行くためにいかなる能力が必要となるか、学生たちの気づきを促していく。学期を追うごとにその気づきが明確な形を持って確認される。そのために必要な具体的な準備としては、1) 授業の際のテーマの選定 (歴史、現代の企業、人生、教育、食生活、エネルギー、経済の発達、異文化、人、言葉の 10 のテーマ) とそれに伴う語彙の拡大、2) 時間を区切って要領よく意見を纏めるスキルの獲得、3) 相手と共に築き上げる対話であるためには聴く力を養成し、相槌を打つ、助け舟を出すなどの補い合うスキルが必要となってくる。1つのテーマを選び、自らのテーマとして深く掘り下げ、発表につなげるにより、語彙が定着する。

さらに授業者側からは、OJAE が B2 と定める基準からコミュニケーションをどう測るべきかを考えてみたい。

この試みは、目標を立てることからその達成に至るまで、学習者が教師と共に参与する形を採るという意味で、これまでの授業形態とは大きく異なる。学習者が自主的に練習を始め、自分たちの言葉でお互い助け合い、尊重し合う態度を学ぶ姿勢。目標言語の単なるテストに終わらず、自分を出し尽くした後で得られる達成感と清々しさ。それらはまた、授業を行う側・評価する側にとっても意識を変える上で大きな意味を持つと考えられる。

AJE-SIG としての OJAE ウェブプレゼンス —OJAE ウェブページを有効に共有するために—

Michiko TAKAGI (マリーアップス外語学院/ブラッセル日本人学校補習授業校)
Yumiko UMETSU

「学習者はテストで作られる」(牧野 2003)という言葉が OJAE 思考で解釈すると「テスト方式・到達レベルそのものが目標となって学習者を鼓舞し、学習者がそのテストに沿う形で成長していく」ということである。OJAE 研究チームは、そのモットーでこれまで取り組んできた OJAE テスト開発の成果を AJE-SIG としてウェブページに公開し、会員と共有していく準備を進めている。

OJAE 研究チームは、これまで OJAE テスト設計図、プロンプトを含む各レベルのテスト、OJAE テストスクリプト、OJAE テスト評価基準表、評価シート、フィードバックシート、レベル基準表示 DVD を開発してきた。将来的には、それら全てを AJE-SIG のウェブページに公開し、OJAE テストを機関、会員各位に有効利用してほしいと願っている。その第 1 段階として、第 2 発表中の教育実践でも学習目標としていた B2 レベルの OJAE テストを「ひな型」として公開する。それを共有することで OJAE テストを理解し、有効利用の出発点とすることを期するものである。具体的にウェブページで公開し共有する内容は、以下の 4 つである: 1) OJAE テスト設計図、2) OJAE テスト B2 レベルのプロンプト、3) OJAE テスト B2 レベルのテストスクリプト、4) OJAE テスト B2 レベルの評価シート。

OJAE 研究チームは、こうしたウェブシステムの構築と共に、世界各地で OJAE 研修会を実施し、OJAE が全世界で共有されることを願っている。そうすることで OJAE は「外国語としての日本語教育」に限らず、例えば「日本語母語話者にとっての対話力テスト」として応用されるなど、新たな学習・教授・評価法の開発にも繋がるであろう。このような OJAE が、対話力を鍛えて他者と分かり合える「ことば」を持った世界市民を育てるための一助となれば幸いである。

5A_A 08 月 03 日 14:00

OJAE (Oral Japanese Assessment Europe)—the European-Born Proficiency Test in Japanese Communication: Assessment>Growing>Nurturing— Developing One’s Dialogue-Competence to Become a World-Citizen

Kōji HAGIHARA (名城大学)
Yoriko YAMADA-BOCHYNEK (ヨーロッパ日本語教育学研究所)
Yasuko SAKAI (ライプツヒ大学)
Michiko TAKAGI (マリーアップス外語学院/ブラッセル日本人学校補習授業校)
Yumiko UMETSU

The AJE-Symposium 2018 asks: “Dialogue for Peace: What are we teaching and learning foreign languages for?” We, the OJAE-Team, would like to rephrase this as follows: “In what way can we assist speakers in their language acquisition so that they become able to communicate with others?” As an answer to this question, we propose: “By imparting dialogue competence, we nurture world citizens who are competent in foreign languages.” In fact, the OJAE system, which tests and assesses the



communicative competence of JFL-speakers and is fully compliant with the CEFR, has been developed for this very purpose. We should hence like to proclaim that JFL classes can now assess the state (of the present degree of language acquisition) → improve dialogue competence further (via supporting assessment), and → nurture (in a collaborative classroom atmosphere).

What is meant by the term “dialogue”? In our understanding, a dialogue can only arise in a communication situation where the subject matter can go back and forth between the speaker and their conversation partner. Communicative competence, as a language skill, can be only fostered in situations where a “dialogue” occurs. In this connection, the OJAE Team contemplated the question, “What is a ‘communication situation’ in the first place?” We have referred to Roman JACOBSON’s (1960) semiotic theory of a “communication model” in which he elucidates 6 factors and 6 functions, respectively, of language: 1) Sender: Emotive; 2) Recipient: Conative; 3) Context: Referential; 4) Message: Poetic; 5) Contact: Phatic; 6) Code: Metalingual. The OJAE-Team has further been advised by Prof. Barry O’SULLIVAN, a renowned expert who has conducted extensive research in the field of speaking tests. He suggested to utilize a major result of a research project on the validity of speaking-test tasks: a checklist of language functions, “designed for both a priori and a posteriori analysis of speaking task output (O’Sullivan et al. 2002)”. It has provided us with a comprehensive list of functions. Building upon this foundation, we have been able to expand Jakobson’s six functions to 53, including sociolinguistic items such as honorific expressions, on the one hand, and to stratify them according to their difficulty to the CEFR levels A1-A2-B1-B2-C1-C2, on the other. Our Panel consists of the following three parts: Part 1: OJAE-Test trains the competence for dialogue owing to its theoretical framework of communication; Part 2: Tests can change the form of the JFL-class itself; Part 3: Web presence of OJAE as an AJE-SIG—towards sharing it effectively and efficiently. We are quite convinced that OJAE has matured into a suitable method for fostering the communication competence of JFL-speakers, and we should therefore like to carry out further OJAE-seminars—in addition to the ones held thus far in Brussels (Belgium) and Cardiff (Wales/UK)—so that our system and our good practices can be shared and disseminated globally.

OJAE-Test trains the competence for dialogue owing to its theoretical framework of communication

Yoriko YAMADA-BOCHYNEK (ヨーロッパ日本語教育学研究所)
Kōji HAGIHARA (名城大学)

Taking the “Situational Model” of Roman JAKOBSON (1960) as a starting point and theoretical background, the following 6 characteristics of OJAE will be elucidated:

1) Test Format: Two testees (test-levels self-assessed according to the “Self-Assessment Grid” of the CEFR 2001: Table 2: pp26-27; OJAE 2010: Table 2: p52) and two testers. The fundamental difference of the OJAE-test in comparison to previous speaking tests lies in its format: the testees are the protagonists of the stage, with each talking using their own words and having to come to grips with each other. There are two kinds of talking: one-way speaking “monologue” and bidirectional-interactive “dialogue”. Even at levels as basic as A1, aizuchi responses are assessed. For levels above B2, intentional avoidances or non-uses are counted as “fail” (similarly to the judging of “fouls” in judo).

2) Test-questions are produced in accordance with the 53 functions of the OJAE-Blueprint, which are classified into four communicative situations (I. Information-Sending, focused on the sender-side; II. Interactional, recipient-side; III. Managing Interaction; IV: Sociolinguistic appropriateness, including “honorific expressions”). These functions draw from research connected to the Cambridge ESOL tests (cf. O’Sullivan, B. et al. 2002, “Using observation checklist to validate speaking-test tasks”), which contributes to assuring the validity of each question. Each of the test questions is embedded into test scripts of the respective level, and the following times are allocated: A-Level 10 minutes; B-Level 15 min.; C-Level 20 min. (cf. OJAE 2010: Table 4, pp57-61).

3) Scaling communicative competence: 53 functions have been stratified according to the 6 CEFR-levels and serve as a basis for creating level-appropriate prompts and test assignments.

4) OJAE-Assessment: For each level, a different test assessment sheet is employed: Common reference levels with 5 qualitative aspects of spoken language use (CEFR 2001: p27; OJAE 2010, pp 53-56). For each test question, OJAE focuses on two “aspects”, thus improving testing practicability.

5) OJAE Assessment Standardization Table (version: 03/01/2018): The table features a 6-leveled stratification and strives for objectivity and transparency in connection with the above-mentioned 5 aspects of assessment. In order to familiarize new assessors with this table, the OJAE-team has conducted seminars with assessment workshops (Feb. 2016: in Brussels, co-hosted with the Belgian JFL-Teachers’ Association; March 2018: Cardiff/Wales/UK, with the Japanese Department, Cardiff University).

6) Feedback of the OJAE-testing: The test results are reported as “pass-fail”, accompanied by comments by the testers. Further ways of developing one’s speaking competence will therefore be shown to both test-takers and their teachers.

Tests can change the form of the JFL-class itself

Yasuko SAKAI (ライブチツヒ大学)

How can spoken, “living” language be assessed? In which form would class activities with the purpose of eliciting “living language” need to be conducted? In the almost two decades since the spreading of the CEFR concept throughout the school education system on EU soil began, it has surely taken root in the education of the EU countries.

In the following, one example of methodological application of OJAE-testing is presented. For the final examination of the bachelor’s degree of Japanology, the B2-level of JFL competence has been determined (For concrete processes, cf. Takagi, M., Sakai, Y., Yamada-Bochynek, Y. 2017).

At the very beginning of a 3-year course, the students and the instructor establish the syllabus for the course together: along the CEFR-scale of Japanese language competence based on the OJAE reference videos illustrating the 6 levels. In each semester, students are encouraged to make themselves conscious about further steps of the scale: Which competence will be required in order for them to reach the next level. Progress will be achieved throughout each semester by creating clear awareness. In achieving this target, the following will be prepared: 1) Selection of a theme (10 subjects such as history, modern enterprises, human life, education, dietary habits, energy, economical evolution, intercultural phenomena, humans, language) as well as the expansion of vocabulary repertoire; 2) Acquisition of the skills within a limited time, summarizing stated opinions; 3) Competence of dialogical interactions: Developing listening competence; chiming in with appropriated remarks; offering helping comments that appropriately support their own partner in a communicative situation. Selecting one major theme, they can deepen it as their own subject and present it in the final report as well as expanding their vocabulary competence.

Furthermore, concerning assessment methods of B2 from the standpoint of the OJAE, it shall be considered how communication competence can be assessed.

The endeavor in this type of assessment differs completely from previous methods in that it involves both sides, students and instructor, equally and synergetically. The attitude of the students: they start their own practicing on their own initiative, establishing their own communicative lessons; help each other, respect the position of the partner, with their own dictions. The result does not merely end with the final test of the target language; instead, they put forth all their strength, obtaining a sense of satisfaction and accomplishment and freshness. For the learners as well as for the teachers, these feelings contribute enormously to changing the system of testing as such.

Web presence of OJAE as an AJE-SIG—towards sharing it effectively and efficiently



Michiko TAKAGI (マリーアップス外語学院／ブラッセル日本人学校補習授業校)
Yumiko UMETSU

“Learners are fostered through tests” (cf. Makino 2003)—This quote can be rephrased in terms of the OJAE R&D as follows: The testing method and achieving goals can encourage the learners and they grow up along this testing design. The OJAE team is currently preparing to present the results of their R&D online, in order to share them with AJE members.

Up until now, the OJAE-Team has developed the following: Test Blueprint, tests of 6 levels with prompts; test scripts; OJAE-Standardization of 6 levels with 5 aspects of competence in oral production; assessment sheets; feedback sheets; sample videos of oral production and interaction, illustrating the 6 CEFR-levels for Japanese (cf. OJAE 2010, 2016, 2018). In the future, all results will be presented online on the AJE-SIG page so that they can be shared by individual members and institutions. As the first step for the future realization, the present part exemplifies B2 OJAE Testing—presented in the second part of this panel—as a model for the remaining levels. The B2 level shared will contribute to the EU-JFL world, the OJAE-team hopes, as the starting point for its effective-efficient utilization on the EU soil. The online presentation will involve the following four items: 1) Blueprint of the OJAE Test; 2) B2 test script; 3) B2 prompts; 4) B2 assessment sheet.

The OJAE-Team constantly strives to improve their web presence, sincerely hoping that further seminar workshops can be conducted throughout the world so that the idea and methodology can be shared in further areas/countries/language entities. By doing so, developing the OJAE test itself could be expanded into yet further areas such as “Dialogue tests for L1 Japanese speakers” or new development in the research areas of “Learning, Instructions and Assessment”. The OJAE method can train dialogue competence so that it could foster world citizens who can communicate with others via “language”.